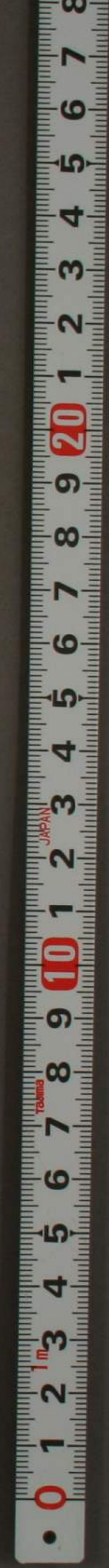


紀伊國名所圖會

一之卷上
和歌山部

ル 4
325
1



風雅の好生を以てしるの中身

紀伊府青霞堂志友とるんが世の

かまうし紀州若所圖會とるんが世

あまうし法場中和とるんが世

國中のあまうし和とるんが世



あまうし和とるんが世

封域の廣き名區佳境の多きを

一帯にほめておとるんが世

若山和所のしる代紀と并せて

か回浦根末とるんが世編し

煙没して地をざん考へぶらぶらめ多う其の山の名水の名田園
 の称呼或は里老の碑までも交へて悉く愚考とせし後人の
 搜索に便せんや正史を必く証せり且郷里に舊蹟ある
 ところの神祠とてむ一村の生土神とするもの其の由来やび
 四季の祭祀あるに至るまでくわく是は載れ
 大社と稱するものたゞ神代のむくよう建ちしより又た
 度の寺院のごとく動じし千有餘年の星霜を経るもの
 ありて其物もあま衰廢ありて或は回祿に罹りて荒れ盡し
 騷然とすらく移るに沿革あると不詳なるにすらく著し
 圖にせしむる當今の景勝とせしむるは寫り
 地に廣狭ありて紙に大小ありて故に地廣大なるもの其處に隨
 て細密ありしむるをりて圖毎に人物を出入りする形の大小
 小にり其廣狭と想へべし

一 圖中間に人物の大图とせしむる其地は關係る怪談奇話佛説
 おのほく古書にせんとせしむる児童の次神と慰せんがあらり
 此等や同じ經歷して履跡のふたふた際先物の紀行とて考
 考へ更に校訂を加へ諸書に引證は其田跡名勝古今移る
 するがごとく必研究せしむる置らざるをりて書に日本紀と稱し
 凡国典に載るるの曲の終する所の野史碑官とすも其
 漁獵してその山を考ふるはむねの採集詩賦の名の
 文集其餘の連歌俳諧の類はむねて其先人の集中
 より抄あるべしとて神祠佛刹の起る所の社司寺僧の記する
 所まことに老田夫の傳る所まを其まあるを採りてと考へ
 り其考證して凡俗を誣し奇怪ありて愚昧を誣りて
 ぐとて其考證して其を誣し其を誣し其を誣し其を誣し
 其佛像の傍中に出るるむね十に七と省けり

紀伊國名所圖會卷之一目錄

國号之事

三神木種と布之圖

郡分之事

國産之事

名草郡之部

和歌山

男水門

片岡の里

刺田比古神社

松生院

廣次地田跡

感應寺

塩送村

芳岩徳義

水本橋

庚申堂

代神樂

國君興敗之事

片岡の里

片岡の里

珊瑚寺

禪林寺

奉久寺

菊本橋

岡東離宮

勅使橋

久成寺

大立寺

大井泉

原見坂

普門寺

空名風松

念誓寺

藤六町

多門院

郭公堂

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '一圖中何人' and '大國'.

感應寺くわんおんじ

乘源院せりげんいん

杖泉寺じょうせんじ

萬務院まんむいん

崇徳寺すうとくじ

天王の夷てんわうのひ

徳勤津とくしんつ

中野の宮なかののみや

明見寺めいけんじ

千手院せんじゆいん

傘師かさし

照え院てりえいん

納良瀬のりよし

中材木所なかまきどころ

向人が坪むかひがのひら

けの碑けのいし

金毘羅權現きんぴらごんげん

八幡宮やっぴんみや

圓津津まづつづ

溜地るいぢ

大空おほぞら

安樂寺あんらくじ

観音寺くわんおんじ

三郎明林さんらうめいりん

石橋いしはし

住吉神社すまじみんじや

前まへ

八百やっぱう

雑ざつ

西店魚市さいてんうしち

雄おとこ

踏ふみ

踏ふみ

踏ふみ

踏ふみ

萬阿茶之疏市まんあぢあしのすち

たけの池たけのいけ

体たい

新源しんげん

志摩しま

猿田さるだ

古ふる

入いり

入いり

入いり

入いり

入いり

入いり

高野たかの

利益院りやくいん

竹たけ

踏ふみ

踏ふみ

踏ふみ

宣のたま

真まこと

法はふ

園うゑん

傾かたむ

阿あ

法はふ

養やしやう

水みづ

三さん

三さん

本ほん

三さん

三さん

三さん

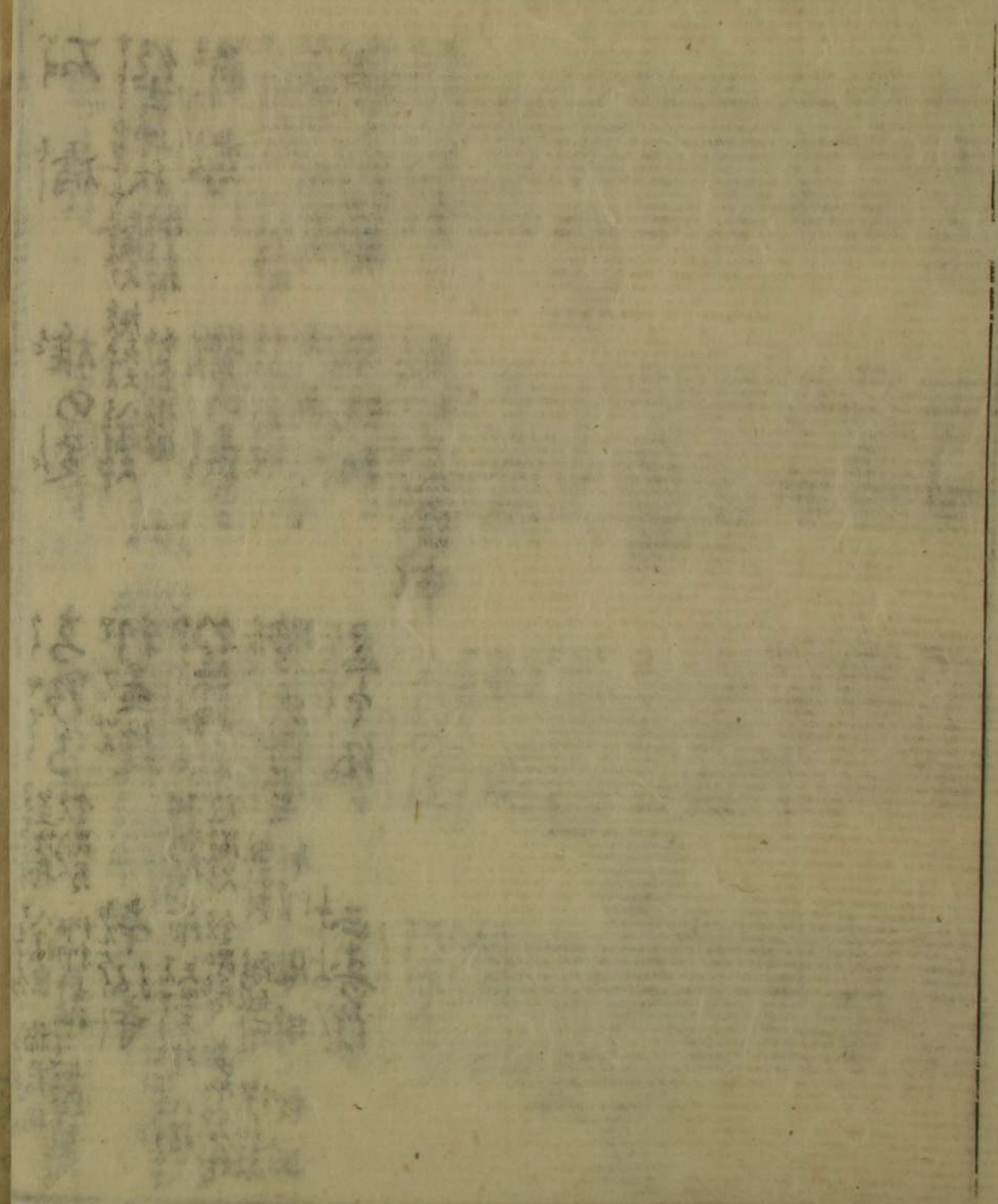
三さん

紀伊國名所圖會卷之壹之上

國号之事

當國の日本國といふ神代のみ素戔嗚尊の五十猛命妹
を大屋津姫命比古杵津姫命と号奉く凡そ三神を本體を分布す
あつて當國の渡坐す本よりと國あはれとて遂に當國を鎮座せ
以上日本紀神代卷の五十五猛命一は本屋比古神といふ名草郡東莊伊太利曾村といふに
伊太利曾神は是より大屋津姫神社同郡平田莊宇田あり都麻津比賣神社同郡吉村
村あり極るに柱神を大屋比古と大屋比賣と杵津比賣と号奉く材の用は屋舎瓜
造り瓜まじり大屋といふ名肩たつてきこ杵といふは截斷の端のありみちるは
その二柱といふは本所の以の神名たりとてあつて本國の名を冠する
其後代より元明天皇の御制にて此の音の韻の伊を極く定ちしり
和同六年の詔は畿内七道諸國の郡名善好字とらんまきこ民部
式に凡そ諸國部内郡里等名並に用二字必取嘉名とせりといふ

城園爾不止將往來妻社專依來西根妻常言長柄 坂上忌寸人
玉匣関卷惜怪夜矣袖可禮而一鴨將寐 柿本入磨





三神本體
布乃
因

家集

胡^あと^り野^の辺^のあ^とを^まさ^して^まん^んの^たん^の風^{あり}なり

續古

伊^い勢^せの^あわ^ある^き濱^のう^らつ^ひ紀^の海^のけ^きなる^月新

玉葉

その^海や^まら^うり^の浦^の遠^くなる^月の^光

夫本

紀^の海^の潮^引の^沖の^てを^あら^りて^るもの^{なり}なり

千首

きの^海や^あの^のま^らう^りの^声の^沖津^の波^の

新撰古

考^のし^もち^のの^瀬凡^のも^のも^の紀^の海^のを^ま

隣す

紀^の海^のの^まら^うり^の浦^の遠^くなる^月の^光

石清水

あ^らら^りて^る紀^の海^のの^まら^うり^の浦^の遠^くなる^月の^光

柏玉

月^のま^らう^りの^浦の^遠く^{なる}月^の光

雪玉

幾^千の^まら^うり^の浦^の遠^くなる^月の^光

州根

と^廣く^の浦^の遠^くなる^月の^光

日

雪^のま^らう^りの^浦の^遠く^{なる}月^の光

郡分之事

延喜式曰。紀伊国管郡七。曰伊都。曰那賀。曰文草。曰海部。曰在田。

曰日高。曰牟婁。○按。牟婁。今。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。曰。和歌山。

國君之事

神武天皇日向國より東征して海を越え野あけをたてて後

天下を統一したるなり。其の功の偉大なるを對して神皇正統記

の孫天皇根命と云ふの國造と云ふたり。是れ別々の國造と

云ふなり。其の功の偉大なるを對して神皇正統記

の孫天皇根命と云ふの國造と云ふたり。是れ別々の國造と

云ふなり。其の功の偉大なるを對して神皇正統記

の孫天皇根命と云ふの國造と云ふたり。是れ別々の國造と

云ふなり。其の功の偉大なるを對して神皇正統記

の孫天皇根命と云ふの國造と云ふたり。是れ別々の國造と

云ふなり。其の功の偉大なるを對して神皇正統記



此二月月... 又... 大伴...
 興起... 國祖南龍... 興起...
 千戈の衢... 興起...
 中と... 興起...
 以来... 興起...
 舟... 興起...
 嶺... 興起...
 景... 興起...

春暮遊城西

四望烟霞地。孤亭水本清。
 大吹源頭客。鶯ね谷裏聲。

簪纓何必求。傳侶此然鶯鶴情。

男水門

日本書紀... 紀國... 見長體... 驚... 紀國...

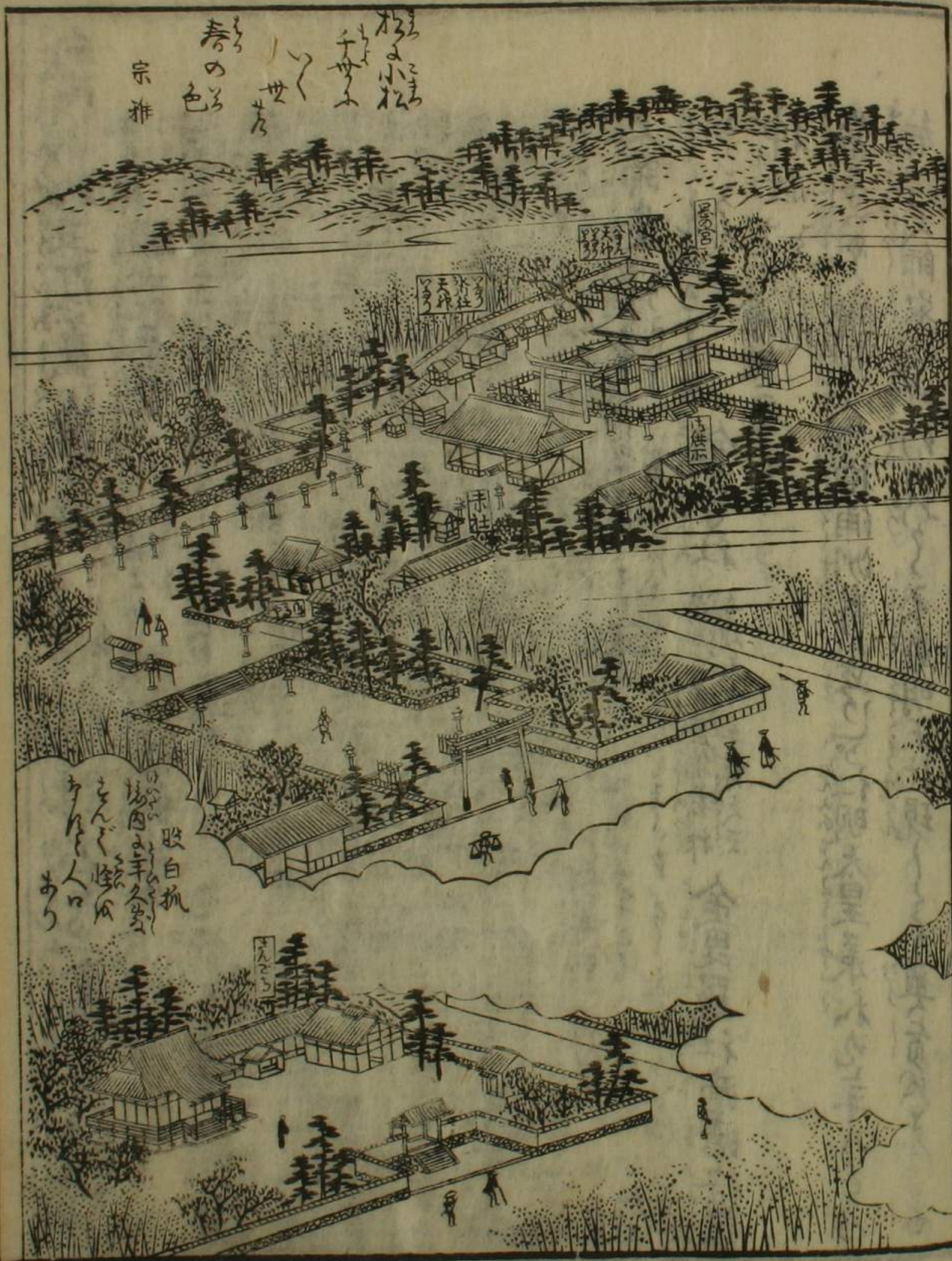
紀國... 見長體... 驚... 紀國...

開のめりて。里老性性にして。あはと刺田比古神社と号する
と瓜信へさるりのあはさるるに旧記は縁を考つるに續日本紀
に聖武天皇神龜元年。冬十月。辛卯。天皇幸紀伊國。成
造離宮於田東。皇賜造離宮司及紀伊國國司郡司并
宮の側近。高年七十以上。祿各有差。百姓今年。細庸。名州。河
部二郡。田租咸免之。とあるに。其岡東の地と云ふ
則ちの長谷の谷を以て離宮の地ありとあるに。かこもく是
と云ふ。祿を賜ひ田租免賜ふ。亦其恩と云れん
があは。或は初瓜建々んと預く。田の文と云ふ。亦其
いもあは。さるるを皇霜後ありて。街頓廢し。かろふ。ね
度の兵亂。社頭もむさるる。果く。唯文化と云ふの
そのりあは。其後廣瀬所より。九頭大明神の祠と
檢りて。その祠の神とあるとある。とある。其九頭

又云。廣瀬所の郭外。國津輪と云る里ありて。今もあは瓜
とて其里のせと社と云ふ。將ともよはる。昔は年中
國祖君より壽附。またま。石燈籠にも。九頭大明神は
と記さる。又出御松生院の寺記も。定文のともまを
あはの別當殿あり。別當と云ふ。九頭大明神と云ふ
其の神。唯神道と云ふと稱して。別當と除と神号とも
あは。刺田比古神社。又國を社と云ふ。ちある。よ。ええら。
是瓜りて。さるる。其の神官ある。唯漢字の心瓜。ちして
皇國訓。ち。瓜。と云ふ。その佐豆彦。後裔。ち。小居
口。と云ふ。ある。ち。其を祖と。國主神。との。ち。ち。
改受も。訓。ち。ち。ち。佐豆彦。後裔。の。ち。ち。す
め。と。改受神と稱し。ち。附舍。ち。め。ち。國を。ち。ち。

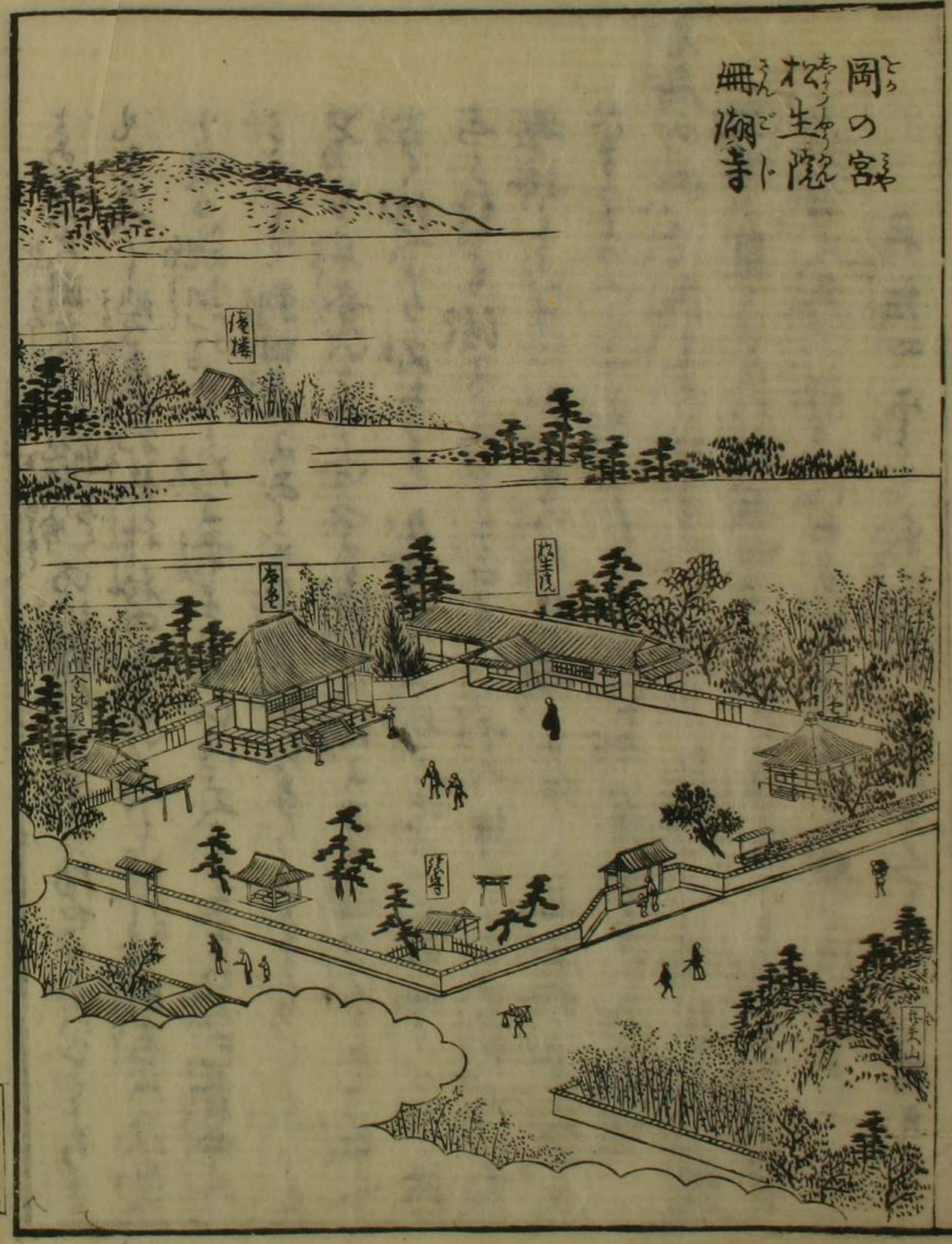
訓とあり。主命受とほりめは異考あり。訓と考とを合せ訓と云。
俗人とも湯桶訓とく口をうとまうてつらした神の御名もあがし
いなんや。りくろ九次と改受の御受の御名もいへる。遠くを去るが
刺田比古神は式の神名帳も見えそへく修る社号をいせ
りあし下り其なる神氏洋の口をいへる其説まて區あり。近來
志太人の古事記傳卷の十の抄や大屋毘古神の二十九丁氏没る事よ。志草
郡の刺田比古神は刺田大神とい由をたたりや田の字の國の字
の誤りあり。此説最ともあり。刺田大神の別
大己貴命乃び五十猛命。大屋津姫命。帆津姫命。母津
刺田若は夢の父神とてこの神おこへる外祖父神に
此國よまづまらゆらんも理たりと云。まづ彼大己貴命が縮羽の
八上比賣は婿たまうてん。兄の八十神および滅まひひる
其祖神といふ本國の大己貴古神五十猛命の別名の神氏も道遣給

とあり。大國主神大己貴命の別名の比國のまづまらゆらんといふこと
もあらず。湯桶の神神氏の事よりいへる。國主は改受
とて訓訓のり。たよあまらうといはる。その大己貴命の
とていへ刺田彦とあり。まづたまりくまらうとありと
たよも早竟いふ。たよはたよは初より國の字を是也
たよはくろ名をまは九頭と神とていふ。何の神とていふ
たよねもはたよのまをる。たよの今も神あり。其刺田比古
神はたよの刺田大神を誤る。あつらえまはたよもたよ
たまらうといふ。年久しとていふ。今も考をたよはる。近世
有廟の御時清生と神まま。またまより社号を考たまは。法崇
敬他。異あり。其神威四方にや。た歳時めを。徳たご。その申
この宮人なるは。氏没る。其神の御人。その袖とていふ。ねら
花壇や。雲も。ねら。八重とていふ。鬼貫



宗雅
春の色
心く
世
千
松

白狐
の
山
の
あり



岡の宮
松生院
無湖寺

庵樓

松生院

松生院

松生山

向陽山生院蘆辺寺

此の寺ありし言ふ本寺不動明王 尺五寸香

服士愛深の文

同十面觀世音

此の寺は... 佛徒の心... 靈験... 感徳... 大師堂... 鎮守社... 神社... 當寺... 智證大師密法... 不動明王化現... 奥旨... 蘆邊寺

たまひくく大師隨其の波りたあは長く恩徳と報んぬ

自一解のる像と彫刻ある是あ本寺に安んずる所の靈像也

のや一く大匠の法文宅成君

大の徳と興しく本寺の盛ん造立を中

其後後れ天皇自觀七年大匠の論旨とをこれ内裏に於て

亦灌頂あせたまふこれ本寺の靈徳不可思議なるより敵

聞既まへて乃藤僕射良相卿の命しく王城鎮護乃

勅願してやゆいりて定寺とほほあうかそ星霜數度はて

後乃羽文皇元曆二年平侯西海に沈没するころ當ちもよふ兵

勢大のころは焦土とせんぬとるころも本堂はくは香像は不

思議なまのれあうりし既よ合錢して終る源家訛訖と奏

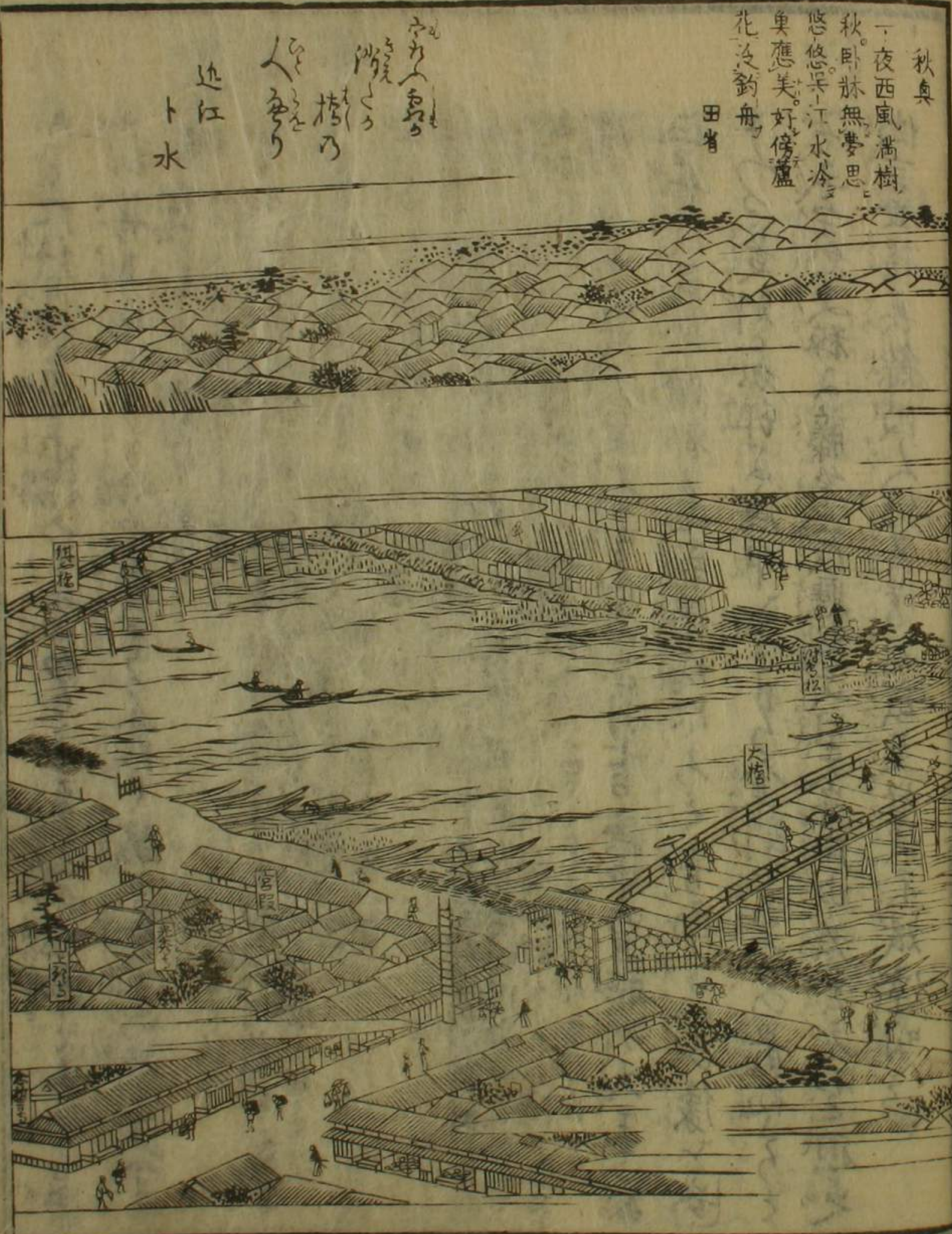
とる日大將軍を支配官九島義經今度のたくりも多くの

在家寺院は焼亡日一とを悔し



四方の嵐雪
 雪降りも丸まのり
 雪道の里か
 あ〜〜
 治東
 月時

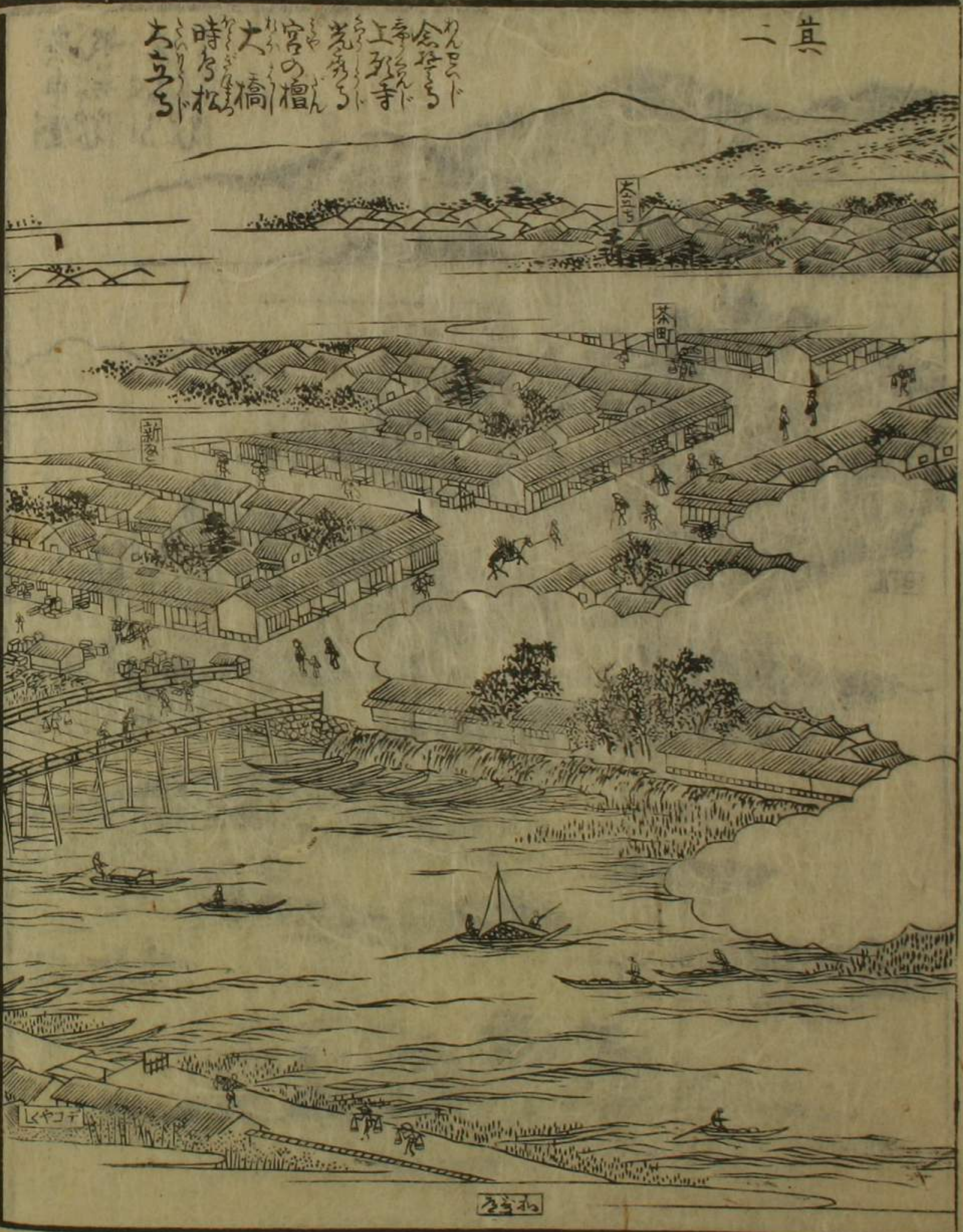
万部と奉久寺
 旧村の山あり
 鬼子母神
 世傳子安の神と云
 照檀妙見菩薩
 妙見が主の靈故に
 津田山普門寺
 古義山觀修寺末
 本尊十一面觀世音菩薩
 大原半
 鹽道村
 此地ふ〜入江に〜塩と焼く
 煎る是楳と持持るものあり
 葛葉の里
 菊卒の橋田
 雪降りも丸まのり
 雪道の里か
 あ〜〜
 治東
 月時



江
水

舟
橋
の
人
を
送
り

秋
真
一
夜
西
風
滿
樹
秋
野
無
夢
思
悠
悠
兵
江
水
冷
真
應
美
好
傍
廬
花
邊
釣
舟
田
省



二
真

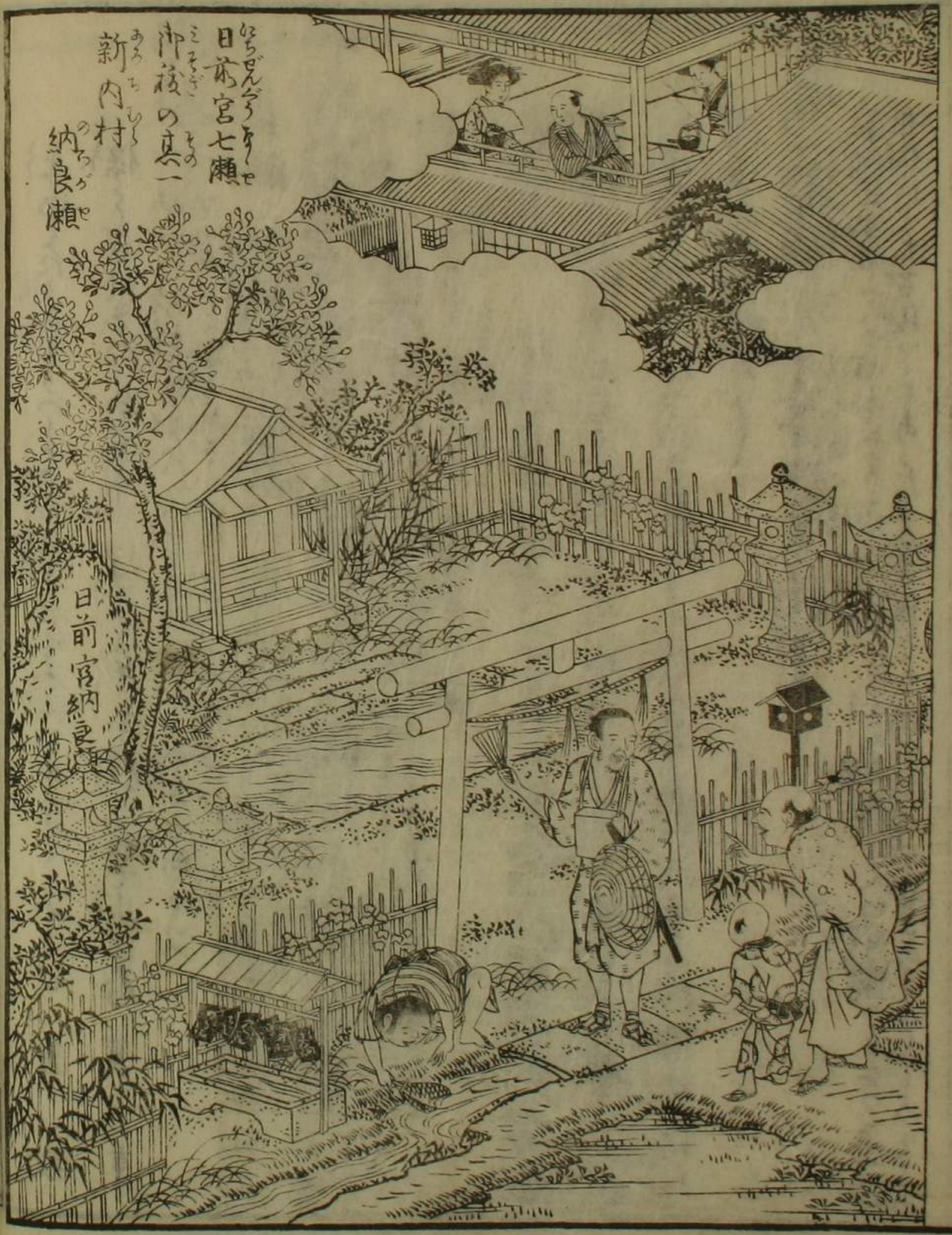
か
ん
ど
と
念
登
り
上
死
寺
光
の
宮
の
檀
大
橋
時
を
松
大
立
り

舟
屋

年毎にまじりとほくゆ省にゆくすてくさ人松うえ 栄 忠
 霜のたまたまもからだうへ世のひいとつとねと本らた 道 切
 ちやうらのるるもまたつへふうらたたの松のの葉 寺 孝
 江なる松のしらや川ぬみかを流せりけちあやさうらむ 正 川
 百千うりやもとのきてわさる松のむしこのころを武 尚 盛
 川とのこめる松の久き世のひげとらるるの葉うえ 素 挺
 ちやうのちやうの世のあふくとんあまの松のこみ葉 幸 孝
 ふ年まの松のむらとん松のうらとん千世のあまの葉 正 川
 まあつるも松のあまのむらとん松のうらとん松の 敬 起
 はりじに年百年十うらの葉松のむらとん松の 好 完
 かたの松の下ゆらう松のむらとん松のうらとん松の 隨 尊
 えあつるも松のうらとん松のむらとん松のうらとん松の 春 葉
 年毎にまじりとほくゆ省にゆくすてくさ人松うえ

年毎にまじりとほくゆ省にゆくすてくさ人松うえ

年のまじりとほくゆ省にゆくすてくさ人松うえ 篤 敬
 保ぎきまらつてせちる川がまき年毎にまじりとほくゆ省にゆくすてくさ人松うえ 賀 亨
 感應寺旧趾 山東屋町もつら 感應寺旧趾 山東屋町もつら
 納良願 山東屋町もつら 納良願 山東屋町もつら
 金剛山常任院遍照寺 山東屋町もつら 金剛山常任院遍照寺 山東屋町もつら
 作長一尺 大師堂 山東屋町もつら 作長一尺 大師堂 山東屋町もつら
 當寺の 國祖君の芳名 山東屋町もつら 當寺の 國祖君の芳名 山東屋町もつら
 盛坊の心 山東屋町もつら 盛坊の心 山東屋町もつら
 たりまらぬとらうらとせたまし所より 靈跡見れば 烟はる人
 けいふ又同断あり
 洪福山宣徳寺 山東屋町もつら 洪福山宣徳寺 山東屋町もつら
 自依にまじりとほくゆ省にゆくすてくさ人松うえ



日新宮七瀬
 新内村
 納良瀬

日新宮納良瀬

此寺は初元...
 日新宮七瀬...
 新内村...
 納良瀬...
 東光寺栗原院薬師寺
 大師堂
 市村本町
 光明山法泉院直光寺
 奉子阿弥陀佛
 海生寺浦
 長洋寺と号し密

鐘樓堂

鐘樓堂 鐘を打つる所の鐘の鐘なりし小寺内府を聖徳太子に奉獻するところにして
威し今の鐘はありかへりともん

出雲の冠を久遠にきく詳たり住する山東の莊は佐村

にありて封境やも廣をりし諸を觀終する淨刹ありしが

中古兵燹のさあ灰燼となりぬそのら僅ま子承瓜言を

送法衣とや一法印の身中真して宛承三年この地を

うろく奉承瓜言より承く布空の徳院ありとるく遠

近の繼を朝言りてくみ源なり

遊萬務務舎

中洲

蒹葭洲上水雲閑樹抄清風滿法臺靜坐

怪來身骨淨禪棲不到世間埃

辻碑

寺内の庭前ありし碑は古くは中洲の邊にありしと云ふ
教撫ありしは此の古くは中洲の邊にありしと云ふ

御伊智橋

伊智橋は古くは中洲の邊にありしと云ふ
世に傳へて封境ありしと云ふ

橋上より東と遠をりし山が勢別ありて時あさなりしと眺を

甚しうし心び多事七月廿二日の夜あり御堂のへりてついで

つねをまらしこそこの新瓜ありしと

七曜山園福院妙見寺

小刹今ありてありしと云ふ
本寺妙見大菩薩

長きより八寸作 大師也

薬師堂

中洲薬師堂 本寺の薬師堂ありしと云ふ
後檀地ありしと云ふ

あつらひに園茅葺を福院長吾阿闍梨の元巻にりしと元

和身中出ぬありしと云ふ
私身中出ぬありしと云ふ

中嶋山崇徳寺

日新ありしと云ふ
本寺ありしと云ふ

崇徳寺の宛承元年教上人の宛創たり境内に銀杏の古樹在

りしと云ふ本ありしと云ふ
とらく本ありしと云ふ

とらくありしと云ふ
とらくありしと云ふ

ひが本枯の雨あつぬ降る考の頼くしては彼みらのくまを
吸て人々を食まうぐとてはく忽ち赤金の地とてやうぬまじも
中後するをよまん同浮檀をよまん

稚子の寺ありしはてらう那

京 世並村

弥勒のつとて天恩を沐するを本立

友 園

志摩神社

延喜式神名帳曰志摩神社は神代正一位志摩神
奉授和十一年正月朔至奉授和十一年正月朔至
奉授和十一年正月朔至奉授和十一年正月朔至
奉授和十一年正月朔至奉授和十一年正月朔至
奉授和十一年正月朔至奉授和十一年正月朔至

紀神一坐中津葛姫命
天眞名并葛姫命而吹葉氣噴之棟霧所生神
飛田田心姫次端津姫次市村島姫命三女矣云々

古事記曰於其先所
生之神多紀理毘賣命者坐自形之奥津宮次市次市島比賣

命者坐自形之中津宮次市津比賣命者坐自形之邊津宮此二柱
神者曾形君等之以伊都之二前大神者也
○舊事紀曰中津嶋

前國宗像加多那とあり又筑前國風土記曰宗像大神自天降居時
門山之時以青鞋玉置奥宮之表以八尺紫鞋玉置中津宮之表以八

咫鏡置邊宮之表以三表成神體之形納置三宮即隱之因曰身形
那後人改曰宗像

相殿生國魂

神末法 天照皇太后神 相殿 燒火大権現祠 ○核

法藏王権現 御長御所 中村 中津宮

皇居 推遷の御所 中津宮

○依園法

中津宮

中津宮

初七人民死するの如と云ふは、中ノ老若にありて、
もつれも心成りて、
石燈籠一基
夫の法の中座座久を有ると考へるべし、
皇霜と云ふは、
源義隆と再興の命あり尋く、
天正十二年二月下旬より四月に、
地倉ら幾場と云ふ、
火の羅つて卒、
八幡宮祠
猿田彦大神約
天王の森

相親と申すは、
見童を女トドロシの價と云ふ、
天王の森
古堤
傾城が淵
溜池
屈原が園と愛する、
めでしつとみは、
こころあはれは、

相親と申すは、
見童を女トドロシの價と云ふ、
天王の森
古堤
傾城が淵
溜池
屈原が園と愛する、
めでしつとみは、
こころあはれは、

こころあはれは、
こころあはれは、
こころあはれは、
こころあはれは、
こころあはれは、



朝日のおま
 涼し神ろ
 去來
 楯中入敷
 然日の泉月定
 俊
 中の島州番
 善城の咄



志摩作社
 八幡宮河
 権田彦河
 辨財天河
 入願寺
 大徳寺
 法隆寺
 心見寺
 徳善寺
 金沢河

本寺虚空藏菩薩 法一尺寺 眼檀歡喜天 七子八女 其令位 小幡 幡 出 出 出

大師堂 弘法大師 像 作 弘法大師 像 作 弘法大師 像 作

角首城若のわろ 尚平の祥ありてこい 威得しなま

安置し いへり 物換星移り 幾れもちり 荒廢されし久

入願寺 日村にあり 淨土宗

真福山医王院法隆寺 日村にあり 浄土宗

大少半 弘法大師 像 作 弘法大師 像 作

光明真言一億八千万遍供養塔 本寺の南にあり 弘法大師 像 作

地藏堂 本堂のまへ 金毘羅大推現社

鎮守祠 天徳左神 秋葉大推現

金龍山五大院明見寺 日村にあり 浄土宗

四大明王像 弘法大師 像 作 弘法大師 像 作

大師堂 弘法大師 像 作 弘法大師 像 作

七巻伽藍の巨刹あり 其始妙見ちと称す

市小路にあり また信長比賣林のけし 時たませ

たり 奉りしとるふ寺も 幾れもちり 荒廢されし久

誰再建 瓜企る 若もちり 了らる 寺身のこと ぬし

荒廢 されし久

荒廢 されし久

荒廢 されし久

荒廢 されし久

荒廢 されし久

荒廢 されし久

荒廢 されし久

荒廢 されし久

荒廢 されし久

荒廢 されし久

荒廢 されし久

此よりわたりしんそま京保十四年長胤上人

國君の命を奉じて中興し南朝の堂宇と建立してまき瓜

金龍山長照院妙見寺号はとんま

國君より奉る五太子の香像を寄附せしめ願所を命ぜ

るふたの宝曆年中洛東坊修寺宮より院号を賜りて五

大院とありて什寶未あまこりりて久も故奉するまの邊

蓮池納涼明見寺園上賦

祇南海

蓮葩腴玉沼園影卧銀漪非下清涼地焉知皎潔姿高

風扇上尚娥月尊前族磊塊良堪沃香淨金屈危

長東山龍護院安樂禪寺

長東山龍護院安樂禪寺 傳説黃藥院 奉る大日如来 王子稻荷祠 座像はくまの像の作

服士不動明王

服士不動明王 傳説大阿闍梨 奉る大日如来 王子稻荷祠 座像はくまの像の作

向陽山蓮花院淨福寺

向陽山蓮花院淨福寺 傳説西二河内 奉る阿弥陀佛 座像はくまの像の作

淨福寺

養光寺

觀音寺

千手院

季春遊觀音寺

吟杖共敲蕭寺

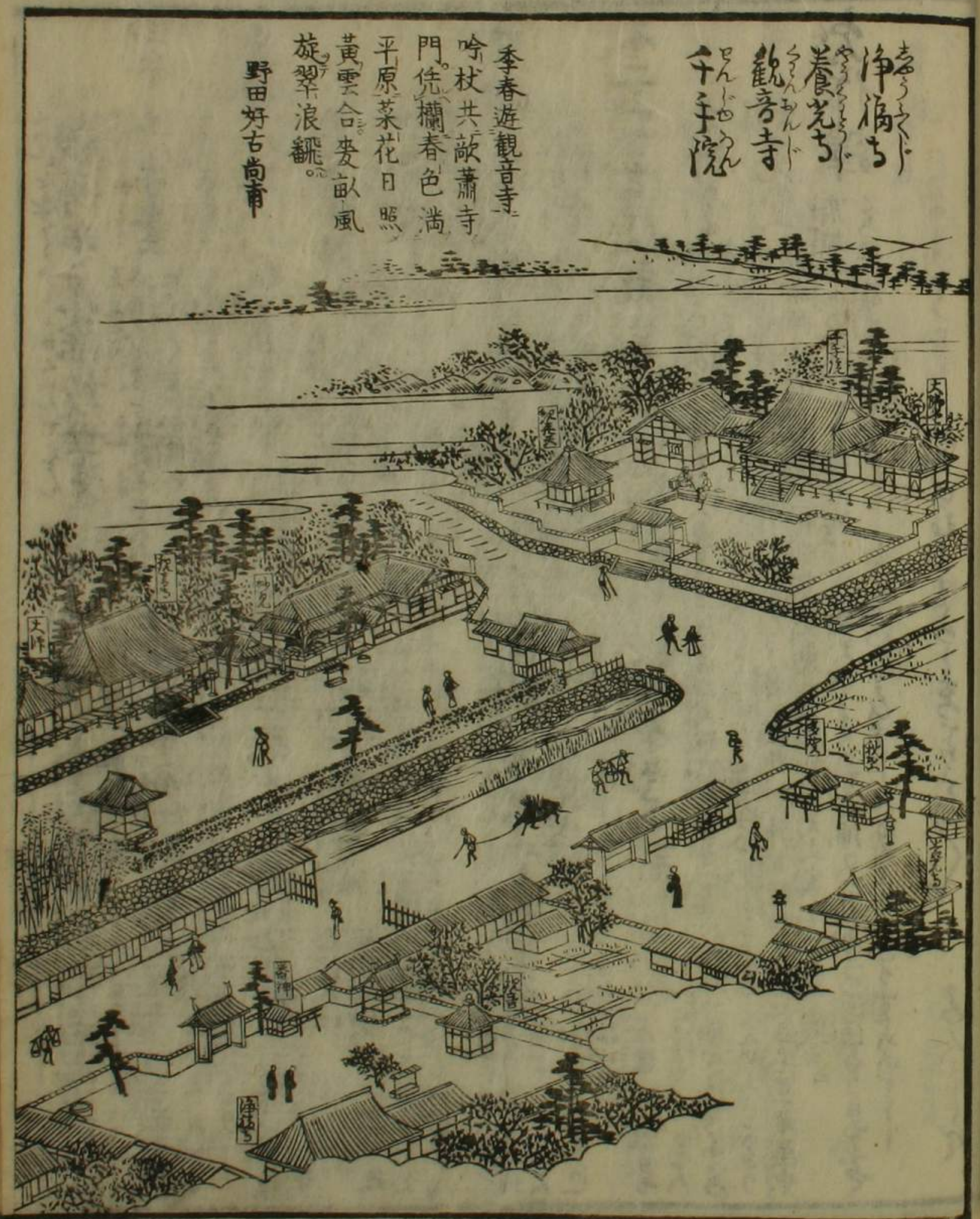
門凭欄春色滿

平原菜花日照

黃雲合麥畝風

旋翠浪翻

野田好古尚甫



觀音也 厄除觀世音 立像七尺九寸 受大阿闍梨唐の元除の立像也

千手堂 千手観音と安ん七五五寸 地藏半字安地并子 立像七尺四寸

真隆山普門院養光寺 日蓮の山あり 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

服士葉師仏 弘法大師の作 毘沙門堂 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

大師堂 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

紫雲山千手院弘誓寺 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

不二山一光院観音寺 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

大師堂 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

妙見堂 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

欠作澤 府城の山の入口にて西国院と云ふ 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

水牛池 日蓮西側のうらなありつみくりに水牛と畜し ところのいまは荒れし

水くく利鎌をくりにまこもり那 京 世田村

傘師 本町九町目にある弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

神留山照光院 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

大師堂 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

三都大明神祠祀神三座 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

舟神樂舎中供所 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

當山延暦年中弘法大師諸國中修の初宗凡弘通のため造建し

なるあり其後災羊の星霜累り中葉以後の兵乱堂塔妙方より

灰燼せりがごとく大悲の應驗古今にあらざるをいふは蟻の體

左子山聖徳院專養寺 弘法大師の作 本寺の鎮守祠 立像二尺四寸

當寺の初佛は真隆を徳左子の関闢はまを



伊藤道基

卷在陰暗髮髻

行藏從用捨

限向風力不揮

遮雨功無

骨珠來壁

河酒竹

紙衣油

雨傘

教

路途上芭蕉點滴



遊年人口傘師

かきこころをのりて
しつちの安んずる
くくたけ
これくわん

おひきせ
おひ

画工
ね好ま

本社住吉社
新益院
本公寺



ト糺つとり山やまに施せ入いりて今いまもそをりて本ほんを坊ぼう舎しゃといふ
 日をひををららくく造ぞう建けんににややららぬぬ靈れい像ざうののままららにに遷うつりますすく
 たりかりかりよりより以も来らい常じょう燈ていののげげのの日ひののみみ光くわん明めいをあある
 そいそいい湯ゆ人にんのの伎ぎのの雲うん霞げととゆゆにに来き去しよととたたとと辨べん二に歳さい毎まいの
 跡あと生せい廿にじふ一いち日にちのの境けい内ない燈てい市しははちちををりり放はな下げ所しよ立たけけ其その儀ぎの
 つつらんらんととああるる一いち山さんままととああるる從そ大だい匠じやうののきき徳とく衆しゆ人にん僧そう作さくの
 ちちををららくくととああるる一いち山さんままととああるる

住吉大神宮

住吉町あり

本社

拜殿

三十二夜

御祭

御座

御座

御座

御座

の比ひ地ぢよりより一いち山さんままととああるる一いち山さんままととああるる
 よよろろくく世せ俗じやく令れい瀬せ寄ぎのの住す吉きち宮みやのの行ぎやう一いち來きままりり本ほん社しゃのの鎮ちん座ざ
 ままいい勝かつ手てのの神かみのの共とものの地ぢ主しゆのの林りんののゆゆりりととああるる一いち山さんままととああるる
 ちちををららくくととああるる一いち山さんままととああるる一いち山さんままととああるる



鷲堂
西本願寺

或曰... 武天皇... 中古... 國史... 寄集... 例載... 十月... 十五日...
或曰... 武天皇... 中古... 國史... 寄集... 例載... 十月... 十五日...
或曰... 武天皇... 中古... 國史... 寄集... 例載... 十月... 十五日...

津之杉原氏のやま...
津之杉原氏のやま...

松... 本居宣長
松... 本居宣長

駿河...
駿河...

奉堂河...
奉堂河...

對面所...
對面所...

御主殿...
御主殿...

太子...
太子...

唐門... 唐門... 唐門...
唐門... 唐門... 唐門...

鼓樓... 集會所...
鼓樓... 集會所...

地屋...
地屋...

世の... 文... 参... 在... 何... 應...
世の... 文... 参... 在... 何... 應...
世の... 文... 参... 在... 何... 應...

よるく如行くもゆゑ志の夢山がたはれあつるとそとに
毫と保く九字十字の号号なるい表書瓜をかり物に
了笑を瓜ぬくあまりの嬉しき涙くゆふと裁きけり奉
一去く送場を各一奉と表書瓜をかり物に
傳る所の二子の神影こほり 裏書の井室 ちつふ水正五年
上人は送場瓜は郡黒江村にうけたまひ後又天文十九年證
如上人ちつふい和歌休勒寺山に後したまひ旧址とめく今
終る水禄六年二月題如大僧正思うに終るこのう治野
貴の地を後とせたまひ尋く天正八年僧正大坂と市用院
伊退去の別 あつてい御堂に移たかりゆくとんく四年その後
市上治あつてたまひ人物前に石山寺に安んずる所の奉り彼接丸
に焼失せせたまひ一終る市堂に安んずる所の奉り奉
持し終る都々也らるる人 今就師西御坊の神初軒 こと

於て當市に立せたるふん奉りあつたりくは其ころ
門徒ふたふたゆるる鈴木孫市 又雜記 ちつふの栄谷八幡宮の
祠に祀置る霊像と移し奉りてこの瓜を別々の奉り
これあるも此奉りの霊験奇特なる凡智のそしけり
ざるふあり嘗本曾隠岐守あるもの出園栄谷と記す此
日西に柱く自菩提院と造立しこれ大菩提寺 旧此 といひ
て初初は寺に立せたまひ一あるが一年兵火の難ありて
やとてく焼せりて不る後や奉りて程火のうらに焼けて
自ら香城の山上よと申せたまひ是よりして後の中
こと殿一御人の瓜異しと易て其をたてりてとて
に彼大菩提の本きの叢中に立せたまひちつふがまを
はる像よりぞ放らたまひける御人のあつたりたる奇特
それ時つこの遠く職く日所八幡宮の祠に祀置る瓜は且後人は誠



左波

山村原の鳥をまゐるに後より

浪花

貞柳

日

あひう〜た船を〜花白にうけま〜けの徳も〜

全

止宿のね〜に〜

慈眼正壽院満光寺

考

大師堂

奉子十一面観世

石地藏尊

西店魚市場

出府に魚市場之行あり

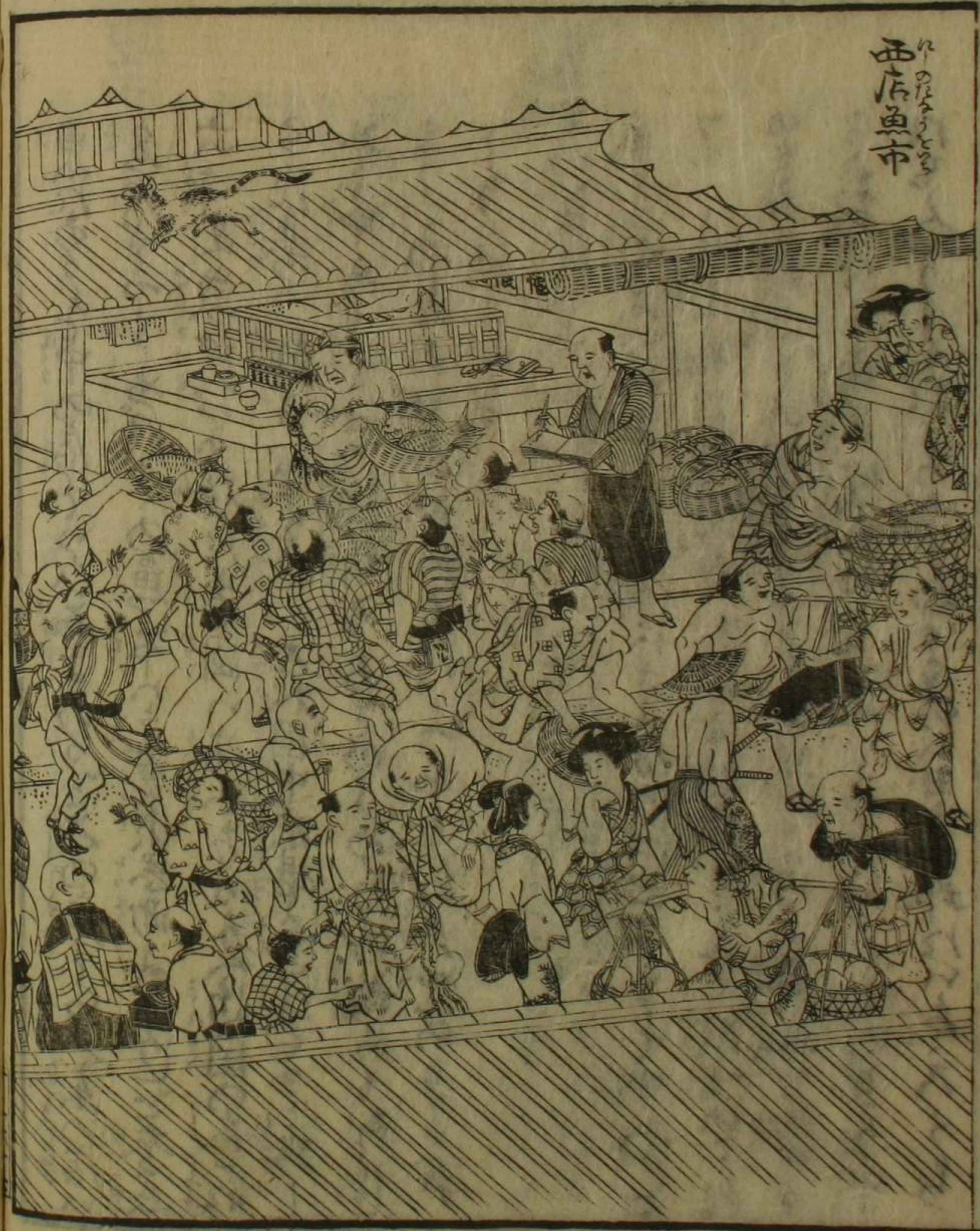
東にあるを中の店〜西の店〜

萬町の茶蔬市

春の美菜の初市〜南国の産物〜



魚屋の賑わい
魚の市
季陰



西店魚市

よりま夏と申し五田郡にり夏も客相と書く不
 時のこのまに關するものありしはまはあへんこまは
 かくしめり雪の中ははるをあらわしけり雪とてこれ
 と食ひしるの著と下はるまはと稱ししるものなや

紀伊國名所圖會卷之上終

包十呼級

